

# 1. 評価結果概要表

作成日 平成21年 4月1日

## 【評価実施概要】

事業所番号	0373100460
法人名	社会福祉法人 慈恵会
事業所名	グループホーム 満天
所在地	岩手県九戸郡洋野町中野3-38-189 (電話) 0194-68-5121

評価機関名	(財)岩手県長寿社会振興財団
所在地	岩手県盛岡市本町通3丁目19-3 岩手県福祉総合相談センター3F
訪問調査日	平成21年2月17日
評価確定日	4月1日

## 【情報提供票より】(21年 1月 19日事業所記入)

### (1)組織概要

開設年月日	昭和・平成 17年 4月 1日
ユニット数	1 ユニット 利用定員数計 9 人
職員数	10 人 常勤 10人, 非常勤 - 人, 常勤換算 8.7人

### (2)建物概要

建物構造	木造 造り
	1階建ての 1階 ~ 階部分

### (3)利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	18,000 円	その他の経費(月額)	円	
敷金	有( 円) (無)			
保証金の有無(入居一時金含む)	有( 円) (無)	有りの場合償却の有無	有/無	
食材料費	朝食	円	昼食	円
	夕食	円	おやつ	円
	または1日当たり		900 円	

### (4)利用者の概要(1月 29日現在)

利用者人数	9名	男性	3名	女性	6名
要介護1	2名	要介護2	3名		
要介護3	4名	要介護4	-名		
要介護5	-名	要支援2	-名		
年齢	平均 80.1歳	最低	55歳	最高	95歳

### (5)協力医療機関

協力医療機関名	洋野町国民健康保険 種市病院
---------	----------------

## 【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

事業所は、旧来からの集落の中にあり、法人内の老人保健施設に隣接して、利用者の散歩外出などでの危険な状況にもなく、閑静な環境の中に位置している。広い共用のスペースには、レンガ造りの大型の暖炉が設置され、穏やかに燃えている暖炉の周りに利用者が思い思いの姿勢でくつろいでいて、安心感の漂う雰囲気になっている。10名の職員の大部分は開所以来の方々と、利用者との関係が深い関係作りで、一人ひとりを大切に丁寧な支援が見られる。日常的な地域との交流に向けての方策、特にご近所との付き合いなどを検討し、更に市町村担当部門との連携もまた積極的な取組みが期待されることである。

## 【重点項目への取り組み状況】

重点項目	①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4) 課題であった職員による事業所独自の理念が作り上げられて、職員全員が共有することにより、改善課題が明らかになり、統一されたケアサービスへの取組みが検討されている。
	②	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4) 自己評価への職員の参加の他、評価の結果、掘り起こされた課題についての会議も持たれて、見直しの作業が進められているが、ケアサービス評価の目的とするところは、確かなケア計画を基にその実践がどうであったかが問われる所であるので、課題解決に向けての職員の意識の共有と意欲が期待されることとなる。
重点項目	③	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6) 運営推進会議は形式を整えることばかりではなく、地域資源の有効活用との視点も大事なこと、事業所側の姿勢が推進会議メンバーの参加意欲にも反映される。事業所では推進会議メンバーの選任に苦労されることであるが、最初は身近な方々から、段々と人数を増やし、幅広い分野の方々の参加を得る事や、毎回の参加が困難な方が居られる場合は、事前に会議のテーマをお知らせして、関連事項の会議には積極的に参加頂くなどの工夫が望まれる。
重点項目	④	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8) 家族からの意見、特に苦情等は少ないが、職員は家族との連絡には信頼関係や話し易い関係作り努力を続けていて、家族への手紙を自筆で書く等、事業所側の意欲は伝えられている。家族からの意見や心情的な汲み取りに継続的な取組みが期待される。
重点項目	⑤	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3) 地域行事への参加は定期的に行われているが、日常生活の中での地域との連携には、固定的な視点や発想ではなく、事業所が一人の住民として果すべき役割を考え、それを確実に実践して地域に近づいていく努力が求められていると考えられる。

## 2. 評価結果(詳細)

(  部分は重点項目です )

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
<b>1. 理念と共有</b>					
	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	職員から募集して「私のみで、あなたのみで、心のみで、のびやかに」とまとめられた職員全員の手づくりの理念は、作って間もない事もあり、来訪者に理解頂くことや地域への周知、広報など一段の工夫が期待される。	<input checked="" type="checkbox"/>	平成18年介護保険法の改正で、新設された地域密着型サービスの基本方針“家庭的な環境と地域住民との交流の下で”を受けて、事業所が目指すサービスのあり方を示し、果すべき役割を反映した内容の理念が基本となっている。またその内容と表現は事業所が独自に作りあげたもので、職員だけのスローガンになることなく、来訪者や地域の方々にもグループホームへの理解の一助になるような広報やパンフレット、事業所内の掲示などの工夫が期待されることである。
	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	職員全員で作上げた理念だが、月々の職員会議でもなお、確認し合い、職員と利用者が一体となっていく“思い”の統一したケアサービスに向け取り組んでいる。	<input checked="" type="checkbox"/>	
<b>2. 地域との支えあい</b>					
	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	地域の敬老会や、保育園との交流会への参加の他、毎月、傾聴ボランティアの来訪などで、地域への交流に努めているところであるが、地域の一員としての本来果すべき役割に向けて、地域自治会への加入などが検討される要件の一つと考えられる。	<input type="checkbox"/>	地域密着型サービスは、利用者が地域と繋がりながら暮らしていくことを積極的に支えていくサービスだと理解されている。その基盤を作るためにもまず事業所が地域に受け入れられ、地域活動や人々との関りを大事に共に暮らす一員としての役割を担っていく積極性が望まれる。
<b>3. 理念を実践するための制度の理解と活用</b>					
	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	自己評価に全員で取り組んでいるが、評価を活かしていく本来の取り組みにも全員で当たるよう、具体的な検討をしている。	<input checked="" type="checkbox"/>	評価は職員が全員で取り組むことと、厚生労働省通知にも明示されているように、評価の一連の過程を通して職員の意識合せ、振り返りや見直しなどが可能となり、事業所の質の確保と向上に活かされることが期待される。
	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今までに開催した運営推進会議では、事業所からの報告に終り、推進会議としての本来の姿では無かった反省から、次に向けて構成メンバーや、会議の持ち方など考慮中である。地域資源の見直しと、有効活用が望まれる。	<input checked="" type="checkbox"/>	運営推進会議では、幅広い分野立場の人々が参加する会議として、事業所への地域からの理解と支援を得るための貴重な機会である。自己評価の内容の説明や外部評価の結果による改善への取り組みをモニターして貰うなど、評価と運営推進会議を一体的に活かしていく事で、相乗的効果が期待出来る。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	利用者の多くが、他の市町村からの利用(入居)ということもあり、市町村と行き来する機会がほとんど無かった。また、運営推進会議のメンバーに市町村の担当者が入っていないので事業所の実情を伝え、共にサービス向上に取り組む機会とはなっていない。	○	新しいサービスの地域密着型サービスでは、市町村も事業所も運営の考え方やサービスについて、そのより良いあり方の模索を続けているが、課題解決には、考え方や実態を市町村担当者との共有は欠かせないことである。事業所だけで、課題を抱え込まず担当者との関係づくりを積極的に行い、協働関係の継続が望まれる。
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	利用請求書送付時に、利用者の近況や連絡事項等を職員の手書きによる手紙でお知らせしている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	苦情相談窓口を設け管理者が受け付け、職員に回覧し課題を検討しながら、質の向上をめざす取り組みをしている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	基本的には固定化されているので、馴染みの職員による支援を受けられるように配慮されている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修計画については検討中であるが、全職員には等しく研修が受けられる勤務体制とし、研修報告書は全職員に回覧されている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者との交流は積極的に行われ、他のグループホーム見学や相互研修会での事例を活かしている。		事業者が自ら提供するサービスの質を向上させていく目的で結成されている事業者団体、県単位又は地域ブロックでの同業者との交流が不可欠であることの認識から、各種会合や研修会への積極的参加が見られるほか、近隣の市町村のグループホームと利用者の参加する合同の行事を開催するなど、形式的な交流ではなく日々のサービスや職員育成に役立つ実践的な連携を目指している。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	利用(入居)後は、家族と十分話し合いながら安心した暮らしが続けられるよう職員との馴染みの関係作りに時間を費やしている。		グループホームの利用者では、サービスを納得して利用出来るまでに時間のかかる方や、家族などの状況で利用が急がれる場合も多いと考えられ、利用者本人の安心と納得が出来ないままの利用を開始する場合のリスクも予測される。家族と十分話し合い、本人と家族に合った個別の利用開始の調整が計られることが望まれる。
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながらか喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	利用者との密接なコミュニケーションを重視し、一緒に作業している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	不安のある利用者には常に声かけをするなど、少しの変化も見逃さないよう努めている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	職員は、連絡ノート(申し送り帳)に毎日の利用者との会話や、ケアの状況、課題の指摘、対応や支援方法等細やかに記述して介護計画作成上の重要資料ともなっている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	3ヶ月ごとに定期的な見直しをしているが、変化が生じた場合は、随時柔軟に変更し、作成している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
<b>3. 多機能性を活かした柔軟な支援</b>					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	利用者や家族にとっての多機能性の理解と支援の実践に課題が残されている。	○	利用者、家族にとっての多機能性とは、事業者として多種類のサービスを持っていることや、利用者に複数のサービスを単に組み合わせて提供するというのではなく、利用者と家族が安心して暮らし続けていくために必要で多様な支援を介護保険サービスや、事業所の自主サービス(例:特別な外出支援、移送サービス、外泊支援)を活かして必要な時、必要なサービスを臨機応変に、また柔軟に馴染みの職員により提供されていくサービスと理解されている。
<b>4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働</b>					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	連絡ノートから受診記録への転記やコピーで、適確な情報がかかりつけ医に届けられ、いつでも適切な医療を受けられるよう支援体制を整えている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	家族には、重度化の指針を説明している。職員は勉強会で学習はしているが、日常的に話し合っていない。重度化した時は入院や関係施設の入所等を考えている。		本人や家族にとって気がかりなのは、重度化した場合や、終末期のあり方であるが、利用が開始される時から事業所では本人や家族関係者との話し合いで方針の統一を図っているが、一度、方針を決めても本人と家族の思いは常に揺れ動くものである。本人や家族、事業所側の状況の変化の度に話し合いを繰り返す積み重ねが求められることになると思われる。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
<b>1. その人らしい暮らしの支援</b>					
<b>(1)一人ひとりの尊重</b>					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	職員は、利用者一人ひとりの個性に合わせた言葉遣いをしている。記録は、鍵のかかる書庫へ入れ管理している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入浴は、一応決まりはあるがタイミングの良い時に合わせて支援している。外の散歩にも職員は、なんとなく付いていく形をとるなど一人ひとりのペースに合わせた支援をしている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
<b>(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援</b>					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は利用者の希望で決まり、職員と一緒に準備し、食事の後片付けをしている。栄養士から栄養チェックをして貰い、行事食では一人ひとりの好みや、(準備などでも)力を活かしたり、外食も行い、食事を楽しむ工夫をしている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	3日に1回の入浴も拒む場合は、言葉がけやチームプレーによりタイミングに合わせ、支援している。毎日のバイタルチェックと、入浴時のチェックにより入浴可否は職員でしている。		入浴への不安や羞恥心、負担感、抵抗感を想像以上に利用者にもたらす事への理解を職員全員が共有し、無理強いすることなく楽しみと、くつろぎの時間になるような支援が望まれる。利用者は高齢者が多く、体調不良での入浴の可否判断や事故など入浴に関するリスク部分も見逃せない要件となっている。
<b>(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援</b>					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	家事の得意な利用者は食後の片付けを取り仕切る等それぞれの特技を活かすよう支援をしている。特技が制限される冬期間は、手芸など手先の仕事を取り入れ気晴らしの支援をしている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	事業所の周辺は、危険が少ないが1時間以上職員の目に触れない場合は、警察や関係機関へ連絡するシステムを作っている。散髪は、利用者の希望により事業所内で理容師さんにしてもらっている。		利用者は屋内だけで過すとストレスによる周辺病状の変化や体調不良になりやすい特徴があり、職員もまた同様と思われる部分があるので、短時間でも戸外に出る機会を作り、気分転換、ストレス解消、また五感刺激を得られる貴重な機会として生活の中に活かしていく支援が望まれる。
<b>(4) 安心と安全を支える支援</b>					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	夜間以外、鍵をかけていない。利用者単独での外出は常に職員が把握出来る状況になっているので、それとなく見守りながらついて行くようにしている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	事業所独自で年1回避難訓練をしている。昨年は、夜間訓練を隣接する法人内の老人保険施設と合同訓練を実施した。非常用物品の備えがなく、まずリストアップすることからが大切である。	○	職員だけの避難誘導の限界を具体的に確認し、日頃から消防署、警察など専門機関との連携を図り、協力体制の柱として事業所の災害時対策に関する理解と協力体制を築き働きかけと共に地域住民や特に事業所地区の消防団の協力は不可欠と思われる。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
<b>(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援</b>					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援  食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	法人内老人保健施設の栄養士に、栄養バランスを チェックして貰っている。連絡ノートには一人ひとりの水分摂取状況も記録されており、10時と3時に定例的に水分補給をするなど適切な支援がなされている。食事は利用者全員の完食を目指して、中には一つの大きな器に、ごはん、おかず共に盛り付け全てが視野の中にあるような工夫がなされている。		飲食量の低下によるカロリーや水分不足は高齢者介護の課題の一つでもあり、日頃の様子を観察しながら柔軟な支援を日常的に積み上げていくことが個別支援の基礎となる。食事時の雰囲気作りもまた食事を楽しむ重要な要素と思われる。
<b>2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり</b>					
<b>(1)居心地のよい環境づくり</b>					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり  共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	どこの場所に立っても隅々まで見渡せるような共用空間で、利用者は大型ソファや、暖炉型の大型薪ストーブの側にそれぞれ思いのままゆったりと寛いでいる様子は、安心を得て心身共に委ねている風情をうかがわせる。利用者の転倒時の安全や器物を落とした時の状況などを考え、弾力のあるクッションフロアで、耳ざわりな音も無く、より落ち着いた共用空間になっている。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮  居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室も好きなように設えていて、清潔で安眠できる工夫がなされている。		